

2019年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	深谷 和広
最終学歴	学位	専門分野
立命館大学大学院経営学研究科企業経営専攻 博士後期課程満期退学	経済学修士	会計学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」に基づいて、経営に必要な知識と技術を修得させ、地域で事業活動を行う企業や組織で活躍できる人材を育成することを目標とする。特に、会計学・財務諸表論等の財務会計分野の専門知識を身に付けた人材を育成する。

(計画)

校訓「真面目」を意識し、学習への真面目な取組みの姿勢を伝え、興味のわく分かりやすい授業活動を積極的に進める。授業内容は授業評価の結果を踏まえて改善を加える。また演習では、学生が主体的に学ぶ機会を積極的に設定し、愛情と情熱の下に学生に学ぶことの喜びを感じる教育を実践する。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

簿記Ⅰ、会計学、原価計算論、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期)

簿記Ⅱ、財務諸表論、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

講義科目では、学生の理解度を高めるために板書とプリント教材を積極的に活用した。演習科目では、視覚的に内容を理解できるビデオ、DVDなどの映像教材を活用した。また文章整理と情報収集及びプレゼンテーションツールとしてパソコンを積極的に活用した。

○作成した教科書・教材

「簿記Ⅰ」「簿記Ⅱ」「原価計算論」「財務諸表論」の講義科目では、毎週オリジナルのプリント教材を作成した。また事前事後の自主学習できるように教科書を積極的に活用した。

○自己評価

「簿記Ⅰ」「簿記Ⅱ」「原価計算論」「財務諸表論」の講義科目では、毎回の講義内容を分かりやすく説明し丁寧に板書することで学習内容の理解・定着と問題意識の醸成に努めた。またプリント教材を通じてトレーニングを積極的に行う授業を行った。また学生の理解を高めるために、前回の講義内容を再確認し、学習内容の定着を高めるように工夫した。日々の取組みの結果、当初設定した教育目標を達成することができた。

II 研究活動

○研究課題

国際化における企業会計制度に関する研究－日・米・英を中心とした比較研究

○目標・計画

(目標)

我が国の企業会計制度への貢献を目指し、国際化の進む企業会計制度について日・米・英を中心として比較研究を実施することを目標とする。

(計画)

これまでも国際化の下での企業会計制度の比較研究を進めてきた。これまでの研究成果を踏まえ、英国及び国際会計基準における開示基準の現状と諸課題について研究活動を具体的に進める。この研究成果は日本会計研究学会等における学会活動を通じて情報発信する。

○2012年4月から2020年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・伊藤秀俊編著、田端哲夫、相川奈美、林慶雲、遠藤秀紀、深谷和広、長岡正、渡邊智、柳田純也、東田明著『入門商業簿記テキスト第2版』中央経済社、2015年3月、120頁-133、150頁-160頁

(学術論文)

- ・深谷和広：「IASB基本財務諸表プロジェクトの予備的検討－EBITと経営者業績指標の導入の方向性－」、東邦学誌第47巻第1号、2018年6月10日、145頁-157頁
- ・深谷和広：「IASB討議資料『開示原則』の検討」、東邦学誌第46巻第2号、2017年12月10日、203頁-217頁
- ・深谷和広：「『IFRS実務記述書：重要性の適用』の検討－重要性のプロセスを中心に－」、東邦学誌第46巻第1号、2017年6月10日、141頁-153頁
- ・深谷和広：IASB『実務記述書：重要性の適用』の検討、『東邦学誌』第44巻第1号、2016年6月10日、91頁-103頁
- ・深谷和広：IASB「開示に関する取組み」の検討－開示原則プロジェクトの現状調査－、『東邦学誌』第44巻第1号、2015年6月10日、151頁-164頁
- ・深谷和広：「戦略報告指針」の検討－年次報告書における情報配置の論点－、『東邦学誌』第43巻第2号、2014年12月10日、25頁-38頁
- ・深谷和広：「ED：戦略報告書指針」の検討、『東邦学誌』第43巻第1号、2014年6月10日、57頁-70頁
- ・深谷和広：討議資料における表示及び開示に関する諸概念－第7節「表示及び開示」の検討を中心に－、『東邦学誌』第42巻第2号、2013年12月10日、161頁-172頁
- ・深谷和広：財務開示フレームワークの提案－『DP:開示フレームワークロードマップ』の検討を中心に－、『東邦学誌』第42巻第1号、2013年6月10日、137頁-156頁
- ・深谷和広：「財務報告における注記開示の役割－『DP：注記開示フレームワークに向けて』の検討を中心に－」、『東邦学誌』第41巻第2号、2012年12月10日、65頁-84頁

(学会発表)

- ・該当なし。

(特許)

- ・該当なし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

・平成30年度（2018年度）科学研究費 基盤研究（C）応募

○所属学会

日本会計研究学会、税務会計研究学会、国際会計研究学会、会計理論研究学会

○自己評価

2019年度も企業の財務報告制度における開示問題への取り組みについて基礎的研究活動を進めてきた。本年度もIASBの開示に関する取組みに係る財務諸表プロジェクトの進行状況を分析する活動を実施してきた。今後も企業会計制度における開示問題の位置づけと実務への影響について研究活動を進める予定である。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

（目標）

建学の精神を意識し、真面目に情熱をもって学務分掌の職責をはたし、大学運営に貢献する。

（計画）

学部長補佐として学部業務を遂行し・入試問題作成副委員長として委員会業務を遂行し、それぞれの業務遂行に邁進して大学の発展に寄与する。

○学内委員等

経営学部・学部長補佐、硬式野球部顧問（部長、強化指定クラブ）

○自己評価

学部長補佐として経営学部長を補佐し、学部執行部の円滑な運営と学部教育の発展に貢献した。入試問題作成副委員長として入試問題作成委員会の業務を企画運営に尽力し、大学教育の発展に寄与した。硬式野球部長として硬式野球部の発展に尽力し、微力ながら大学の学生生活活動支援に貢献した。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

（目標）

2019年度の愛知大学野球連盟の企画・運営に理事として関与し、積極的に連盟活動に貢献する。

（計画）

2019年度事業計画に基づき、春秋リーグ戦等の事業を実施し、魅力ある大学野球を実現する。

○学会活動等

該当なし

○地域連携・社会貢献等

愛知大学野球連盟理事

○自己評価

2019年度愛知大学野球連盟理事として年間業務を遂行し、連盟活動の推進という目的を達成することができた。

Ⅴ その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

三つの言葉を心に置きながら日々自己研鑽に邁進したい。学生の成長を支援する教育者として日々の教育・研究活動等を通じて自己の能力を十分に発揮したい。毎年の改善点を意識し実践を続ける。

VI 総括

大学教員として、教育・研究活動を中心として、2019年度も教育・学生指導面において積極的に大学の諸活動に貢献することができた。また、大学硬式野球部部長として強化指定クラブ運営・推進の業務を担当し、愛知大学野球連盟理事として連盟活動に貢献することができた。また経営学部学部長補佐として学部執行部の運営と学部教育活動の推進の面で大学の教育活動に貢献した。また入試問題作成副委員長として入試問題作成業務全般の業務を補佐して入試に貢献することができた。

以 上